

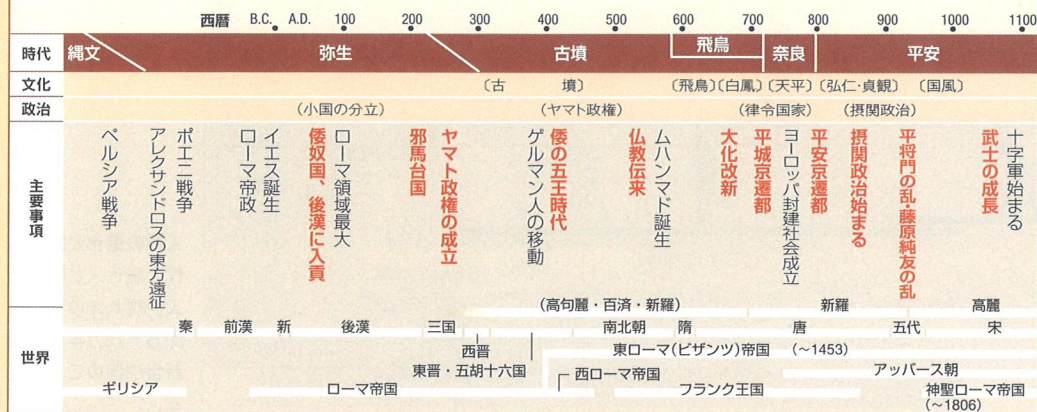
原始・古代

人類の歴史は今からおよそ700万年前、地質時代区分でいう新第三紀の終わり頃に始まるが、猿人・原人・旧人の段階を経て、現代人と同じ新人が出現するのは約30万～25万年前と考えられる。人々は野生の動植物を狩猟・採集して生活し、さらに植物を栽培し動物を飼育する農耕・牧畜の段階に進むと、急速に社会を発展させた。

紀元前7000年頃、エジプト、メソポタミアの「肥沃な三日月地帯」と呼ばれる地域で、農耕・牧畜が始まった。やがて強力な帝王の支配のもとでピラミッドや神殿などの巨大な建造物が築かれ、象形文字や楔形文字で記録する方法も考え出された。農耕・牧畜の文化は、約4000年のあいだに、西はヨーロッパから東は中国に至るユーラシア大陸の各地に現れ、西方ではギリシア・ローマ文化、東方では漢文化・インド文化を開花させ、ローマ帝国と漢帝国のあいだには、シルク＝ロード(絹の道)と呼ばれる東西交流の道も開かれた。

やがてゲルマン人の大移動が活発になり、西のローマ帝国では支配が崩れ、東の漢帝国も分裂ののち、北方民族の侵入を受けて五胡十六国時代を迎えた。民族移動によって新しい地での活動を始めたゲルマン人の中で、フランク王国を中心に新しい支配体制が生まれ、キリスト教を奉じて封建社会が築かれていった。一方、中国では律令制度をもとにして隋・唐が国家統一を実現し、そのもとで文化が栄え、つぎの宋に受け継がれていった。同じ頃、東西間に横たわる乾燥地帯に、ムハンマドに始まる「イスラーム帝国」が生まれ、イスラーム教による独自の文化を広めて8～12世紀に全盛を誇った。

このような世界の動きに対し、更新世の旧石器文化から完新世の縄文文化へと進んだ日本列島の社会は、中国・朝鮮半島の農耕文化の影響を受けて弥生文化を生み、国家の形成を進め、律令制を導入して古代国家を築いた。しかし、支配層としての貴族の地位は、やがて各地に成長してきた武士によって制約を受けるようになった。



日本文化のあけぼの

大陸から日本列島に渡ってきた人々によって、日本列島の人類史は幕を開けた。旧石器時代から縄文時代、弥生時代と移行していく中で、自然環境に適応しつつ、定住生活や農耕生活が繰り広げられていった。日本列島の自然環境はどのように変化し、人々の生活や文化にどのような影響を与えたのだろうか。

1 文化の始まり

Q▶ 現在の日本人は、どのようにして形成されたのだろうか。

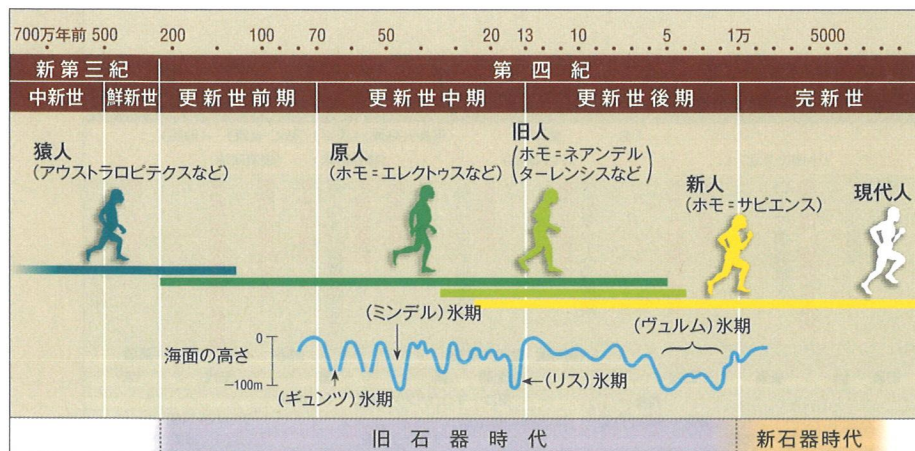
① 猿人の化石は、アフリカにしか発見されておらず、人類はアフリカで誕生したと考えられている。もっとも古い化石人骨は、アフリカのチャドで発見されたサヘラントロプス＝チャデンススで、およそ700万年前にさかのぼる。

② これら各種の人類は、一直線に進化したのではないことに注意をする必要がある。

日本列島と日本人

地球上に人類が誕生したのは、今からおよそ700万年前にさかのぼる。人類は化石人骨の研究によって、猿人・原人・旧人・新人の順に出現したことが知られている。猿人を代表するのはおよそ420万年前以降にアフリカ大陸の各地で出現したアウストラロピテクスであり、それ以降およそ250万年前に猿人から原人が分岐し、およそ35万年前にネアンデルタール人に代表される旧人が生まれ、30万～25万年前にアフリカ大陸で新人(ホモ＝サピエンス)が現れて、世界各地に広まった。われわれ現代人は新人と同じ種に属する。

人類は地質学でいう新第三紀の中新世の終わり近くから第四紀を通じて発展したが、第四紀はおよそ1万年前を境に更新世と完新世に区分される。更新世は氷河時代とも呼ばれ、寒冷な氷期と比較的温



人類の進化と地質年代 現代人と同じ新人が現れたのは、約30万～25万年前の更新世中期のことである。

Q▶ 旧石器時代の人々は、
どのようにして食料を獲得
していたのだろうか。

①1946(昭和21)年に相沢忠洋
によって、赤土と呼ばれる火
山灰の関東ローム層の中から
石器が発見され、1949(昭和
24)年に学術調査がおこなわ
れた。

②日本列島で発見されている
旧石器時代の遺跡の多くは約
3万8000年前以降の後期旧石
器時代のものであるが、各地
で中期(約13万年前～約3万
8000年前)や前期(約13万年以
前)にさかのぼる遺跡の探究
が進められている。

③細石器は、長さ3～4cmの
小石器(細石刃)を、木や骨な
どでつくった軸の側縁の溝に
何本か並べて埋め込んで用い
る、組合せ式の石器である。
刃こぼれがするとその部分だ
け石器を取りかえることがで
きる。この時期の遺跡として
は、北海道の白滝遺跡群など
が知られている。

④つくりかけの石器や石くず
がいくつかまとまって直径
50mほどの範囲に環状に分布
する遺跡もあり、移動する集
団どうしが共同して狩猟をお
こなった跡と考えられている。

Q▶ 旧石器文化から縄文文
化への変化を引き起こした
要因は何だろうか。

旧石器時代の石器と使用法 ①打
製石斧、②ナイフ形石器、③尖頭
器、④細石器。

(①東京都鈴木遺跡出土、②神奈川県寺尾遺
跡出土、③神奈川県月見野遺跡出土、④長
野県矢出川第1遺跡出土)

旧石器人の生活

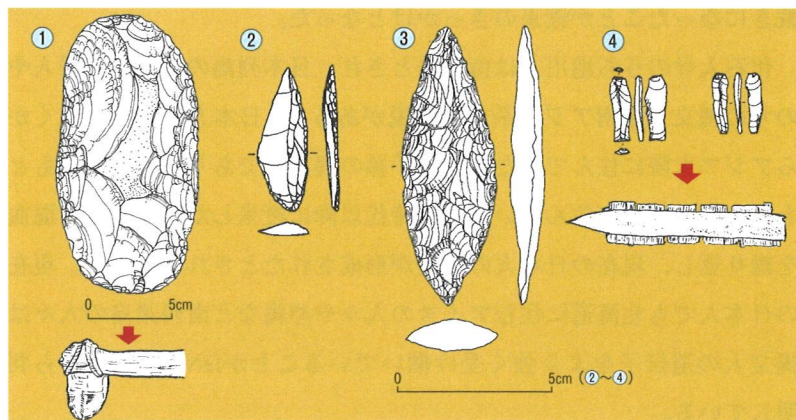
かつて、日本列島に旧石器時代の遺跡は存在し
ないと考えられていたが、1949(昭和24)年、群
馬県の岩宿遺跡の発掘調査①により、更新世に堆積した火山灰の関
東ローム層から打製石器が確認された。以後、日本列島の各地で縄
文時代以前の更新世の地層から石器の発見があいつぎ、旧石器時代の
文化の存在が明らかになった②。

この時代の人々は、狩猟と植物性食料を採集する生活を送ってい
た。狩猟にはナイフ形石器や尖頭器などの石器を木などの棒の先端に
つけた石槍を用い、ナウマンゾウ・オオツノジカ・ヘラジカなどの大
型動物を捕らえた。旧石器時代の終わり頃には、中国東北部からシベ
リアにかけて著しく発達した細石器③と呼ばれる小型の石器が日本列
島にも広まった。

旧石器時代の人々は獲物や植物性の食料を求めて、絶えず小河川の
流域など一定の範囲内を移動していた。このため、住まいも簡単なテ
ント式の小屋で、一時的に洞穴を利用することもあった。生活をとも
にする集団は、10人前後の小規模なものであったらしい④。旧石器時
代の遺跡からは、動物を捕獲するための落とし穴が見つかることもあ
る。また、集石と呼ばれる焼けた石の集合が発見されるが、肉を蒸
し焼きにするような調理の場と考えられている。

縄文文化の成立

今からおよそ1万年前、最後の氷期が過ぎて
完新世になると地球の気候も温暖になり、海面
が上昇してほぼ現在に近い日本列島が成立した。亜寒帯の針葉樹林に





縄文土器の変遷 縄文土器の多くは深鉢であるが、浅鉢・台付鉢・注口土器などもある。

(①長野県石小屋洞穴遺跡出土、國學院大學博物館蔵、②北海道中野A遺跡出土、市立函館博物館蔵、③千葉県二ツ木 向 台貝塚出土、南山大学人類学博物館蔵、④長野県曾利遺跡出土、井戸尻考古館蔵、⑤千葉県上 宿貝塚出土、京都大学総合博物館蔵、⑥東京都小豆沢貝塚出土、東京国立博物館蔵)

かわって、東日本にはブナやナラなどの落葉広葉樹林が、西日本にはシイなどの照葉樹林が広がった。大型動物は絶滅して、動きの速いニホンジカやイノシシなどの中・小の動物が多くなった。

こうした自然環境の変化に対応して、人々の生活も大きくかわり、

- 5 日本列島に縄文文化が成立した。この文化は約1万6000年前⑤から、水稻農耕をともしう弥生文化が始まる約2800～2500年前までの期間にわたるが(縄文時代)、とくに温暖化が顕著になる約1万1700年前以降に発展した。縄文文化を特徴づけるのは、食料を煮るための土器、中・小型動物を射とめる狩猟具の弓矢、さらに磨製石斧など全面を磨いてつくった磨製石器の出現といった点である⑥。

⑤放射性炭素である ^{14}C の濃度を機械で測定して年代を割り出す方法が、 ^{14}C 年代測定である。日本列島でもっとも古い土器に付着した炭化物の ^{14}C 年代測定をおこなったところ、約1万6500年前の年代が出された。これは更新世の水期に相当するので、土器の出現を縄文時代の指標にすべきではないという意見もある。

- 縄文時代に用いられた土器は、表面に細い縄を転がしてつけた縄文という文様をもつことが多いので、縄文土器と呼ばれている。縄文土器の変化によって、この時代は草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に区分される。このうちの草創期の土器は、世界でもっとも古い土器の仲間であり、更新世の終末から完新世への移行期における自然環境の変化に応じて、日本列島に住む人々がいち早く新しい文化を生み出していった結果である。

⑥西アジアや中国などにおける新石器時代の文化は、磨製石器を用いた農耕文化である。それに対して縄文文化は、磨製石器を用いてはいるが基本的には採集・狩猟文化であり、ユーラシア大陸各地の新石器文化と性格が異なる。

縄文人の生活と信仰

- 縄文時代の人々は、大きく変化した新しい環境に適応していった。とくに気候の温暖化にともなって植物性食料の重要性が高まり、前期以降はクリ・クルミ・トチノキ・ドングリ類などの木の実が採集された⑦。ヤマノイモなどの根茎類も食料にされたであろう。また、クリ林の管理・増殖、さらにダイズなどマメ類・エゴマ・ヒエ類などの栽培もおこなわれた

⑦灰汁の強いトチノキの実やドングリ類を食用とするには、水にさらしたり、土器で煮たりして灰汁抜きをする必要があるが、縄文時代後期・晩期の水さらしのための木組みの施設が、東日本を中心に多数検出されている。



縄文時代の道具 ①②石鏃、③石匙、④打製石斧、⑤磨製石斧、⑥⑦鹿の角でつくった釣針と銚、⑧石皿と磨石。

(①群馬県堀之下出土、群馬県立歴史博物館蔵、②群馬県西新井遺跡出土、群馬県立歴史博物館蔵、③北海道茂辺地遺跡出土、国立歴史民俗博物館蔵、④⑤群馬県西新井遺跡出土、群馬県立歴史博物館蔵、⑥⑦宮城県沼津貝塚出土、東北大学文学研究科蔵、⑧岐阜県堂之上遺跡出土、高山市教育委員会蔵)

①土器をつくる際に素地にまぎった植物の種が、土器を焼く際に抜け落ちてくぼみとなって残る。そのくぼみにシリコンを注入して型どりし、それを電子顕微鏡で観察して種を同定する分析が進み、縄文土器から各種の栽培された可能性のある植物の痕跡がみついている。しかし、イネ・アワ・キビなどの穀物は縄文時代の終末にならないと登場しない。

②貝塚は、人々が食べた貝の殻や獣の骨、魚の骨など、捨てたものが堆積して層をなした遺跡である。そこは墓地に利用されることがあり、貝殻に含まれるカルシウム分で保護されたことにより、埋葬人骨が出土する例も多い。なお、日本の近代科学としての考古学は、1877(明治10)年にアメリカ人の生物学者モースが東京にある大森貝塚を発掘調査したことに始まる。

可能性がある①。土掘り用の打製石斧(石鏃)、木の実をすりつぶす皿や磨石なども出土している。

狩猟には石鏃を矢の先につけた弓矢が使用され、落とし穴などもさかんに利用された。狩猟のおもな対象はニホンジカとイノシシである。狩猟にはイヌが使われた。イヌが狩りのパートナーであったことは、イヌの埋葬例が数多くみつまっていることからわかる。また、気候が温暖化して海面が上昇したことによる海進の結果、日本列島は入江の多い島国になり、漁労の発達がうながされた。このことは、今も各地に数多く残る貝塚からわかる。釣針・銚・ヤスなどの骨角器とともに石鏃・土鏃がみられ、網を使用した漁労もさかんにおこなわれていた。各地で発見される丸木舟、伊豆大島や八丈島にまでみられる縄文時代の遺跡は、縄文人の外洋航海術を物語っている。

縄文時代早期から前期になると気候の温暖化によって食料資源が多

読みといてみよう

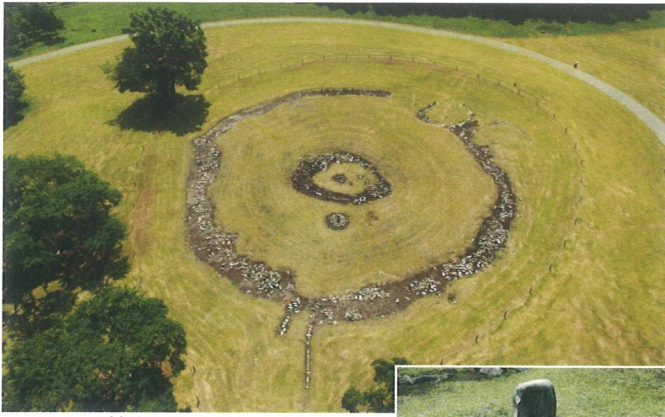
貝塚と住居跡の広がり方や等高線に着目して、縄文時代の集落のあり方について考えてみよう。

貝塚(千葉県貝の花貝塚) 台地上に馬蹄形に広がる貝塚の下から、約33軒の住居跡が発見された。

(八幡一郎ほか「貝の花貝塚」より作成)



詳しく
みてみよう!
貝塚



環状列石 大湯環状列石は直径が50mにおよぶ。二重の列石からなり、内側には立石をともなった集石がある。石は7～8kmも離れた川から運んだもので、組織的な共同労働を物語る。

(秋田県大湯野中堂遺跡、鹿角市教育委員会)



縄文時代のおもな遺跡と黒曜石の交易圏 黒曜石は、石器の原材料としてさかんに用いられた。北海道白滝、長野県和田峠などの原産地が確認されている。製品の広範な分布から、原産地・消費地間の交易のあり方がわかる。



(薬科哲男ほか「黒曜石、サマカイト製石器の産地推定による古文化交流の研究」などより作成)

様化し、その獲得方法や加工技術が進展することにより人々の生活は安定して定住的な生活が始まった。縄文人は様々な食料を季節に応じてたくみに利用しており、そのための年間の生活スケジュールも定住生活の中で固定されていったと考えられる。

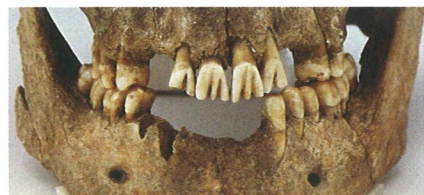
- 5 縄文人は地面を掘りくぼめ、柱を立てて屋根を葺いた**たてあなじゅうきょ** 縦穴住居に住んだ。住居の中央には炉が設けられ、5人ほどの家族が住み、いくつかの縦穴住居が集まって20～30人ほどの集落をつくった。縄文時代の集落は水はけのよい台地上に営まれることが多く、縄文時代前期から中期には広場を囲んで数棟の縦穴住居が**かんじょう** 環状に並ぶ環状集落も増えた。集落には、食料を保存するための貯蔵穴群、さらに青森県**さんない** 三内丸山遺跡のように、たくさんの人を収容することのできる大型の縦穴建物をともなう場合もある。環状集落の中央の広場が墓地になっている場合も多く、縄文人は死者を遠ざけることがなかったようである。縄文時代後期以降の東日本の各地には、石を環状に配したストーン＝
- 15 サークルと呼ばれる環状列石が設けられたが、これは共同墓地と考えられており、祖先祭祀の意識が生まれていたとする意見もある。

こうした集落は近隣の集落と通婚し、様々な情報を交換しあった。また**こくようせき** 黒曜石など石器の原材料やヒスイ(硬玉)などの分布状況から、かなり遠方の集団との交易もおこなわれていたことが知られている。

Q▶ 人々の定住は、なぜ可能になったのだろうか。



うるしぬぐし うしろや おけ
漆塗櫛(埼玉県 後谷遺跡出土、桶
がわ 川市歴史民俗資料館蔵)



土偶・石棒と抜歯 左は宮城県恵比須田遺跡出土の遮光器土偶(高さ36.1cm、東京国立博物館蔵)。中央は、北海道美沢1遺跡出土の石棒(長さ42.2cm、北海道立埋蔵文化財センター蔵)。抜歯は成人の健康な歯を抜く風習で、右の愛知県伊川津貝塚出土人骨は上の犬歯2本と下の切歯4本を抜き、上の切歯4本をフォーク状に削っている(東京大学総合研究博物館蔵)。

①一方で、縄文時代後期末から晩期には、北海道の一部で装飾性の豊かな漆塗りの櫛を身につけた人物の特別な墓も出現するなど、単純な平等社会とはいえない状況になったことがわかる。

②土偶は縄文時代草創期に出現して弥生時代に継続する縄文文化を代表する遺物である。縄文時代の土偶は1万個以上出土しているが、大半が女性をかたどっており、妊娠・出産・育児の様子を表したものもある。

Q▶ 土偶は、なぜつくられたのだろうか。

③発掘された人骨から、大正時代に、縄文時代の風習として抜歯があることが確認された。歯のすり減り方から年齢が推定できるが、それによればもっとも若い抜歯人骨は14～15歳とされている。

縄文時代晩期には漆で飾った土器や櫛などが多くみられるが、これらも交易品になった可能性が高い。仕事は男女で分担されていたようであり、男性は狩猟や石器づくり、女性は木の実の採集や土器づくりにはげんだ。弥生時代の墳丘墓や古墳のような副葬品を大量におさめた高塚がないことなどから、統率者はいても人々の身分の差はそれほど明確ではなかったことがわかる①。

縄文人は、あらゆる自然現象や自然物に靈魂がやどると信じていたと考えられている。これをアニミズムというが、呪術によってその災いを避けようとし、また豊かな収穫を祈った。女性をかたどった土偶②や男性の生殖器を石で表現した石棒は、そうした呪術と儀礼の発達を物語る。イノシシの土製品や口縁部にイノシシをかたどった土器も多くつくられたが、これはイノシシの強い生命力をたたえたものと考えられている。健康な歯を抜く抜歯の風習③は、縄文時代の中頃からみられ晩期に盛んになった。抜歯は成人になった時などにおこなわれた一種の通過儀礼で、集団の統制のきびしさをうかがわせる。埋葬④という手足を折り曲げた埋葬も、死者の霊が生者に災いをおよぼすことを恐れておこなわれた呪術的な葬送儀礼によるものであろう。

縄文時代後期から晩期の関東地方などでは、直径が100mにおよぶ範囲に環状に土を盛り上げた環状盛土遺構が知られており、集団が力をあわせておこなった祭祀の遺構だと考えられている。縄文時代も後半になると儀礼の道具や祭祀の施設が発達し、大規模化するなど、社会が徐々に複雑化していった。

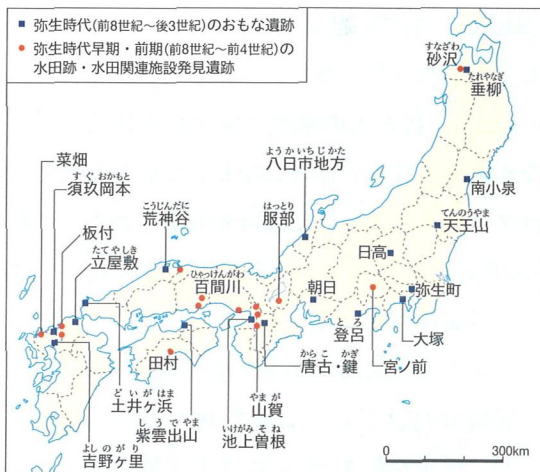
佐賀県菜畑遺跡、福岡県板付遺跡など、西日本各地で縄文時代晩期の水田跡が発見され、水稲農耕が始まっていたことが明らかにされている。

2 農耕社会の成立

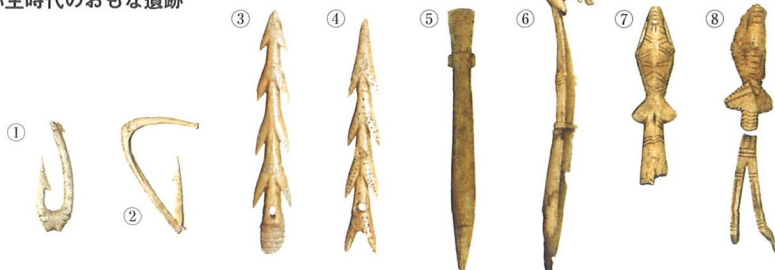
弥生文化の成立

日本列島で1万数千年余りも縄文文化が続いているあいだに、中国大陸では紀元前6500～前5500年頃、東北地方や黄河中流域でアワやキビなどの農耕がおり、南の長江(揚子江)中・下流域でも稲作が始まり、農耕社会が成立した。中国における農耕文化の発達、周辺地域に強い影響をおよぼし、農耕は朝鮮半島を経て日本列島にも波及した。

縄文文化が終末を迎えた紀元前8世紀頃、朝鮮半島に近い九州北部で水田による米づくりが開始され、紀元前5～前4世紀頃に東日本にも広まった⁴。北海道と南西諸島を除く日本列島で、水稲農耕を基礎とする農耕文化が形成されてから、古墳がつくられるようになる3世紀半ばまでを弥生時代と呼び、その文化を弥生文化と呼んでいる⁵。弥生時代は土器の変化にもとづいて、早期・前期・中期・後期の4期に区分されている。



弥生時代のおもな遺跡



Q▶ 水稲農耕など大陸から伝わった新しい文化や技術は、人々の生活にどのような影響を与えたのだろうか。

4 弥生時代早期の土器に付着した炭化物の¹⁴C年代測定をおこなった結果、弥生時代の始まりが従来の前5～前4世紀頃よりも数百年さかのぼるとされるが、さかのぼる年代の幅についてはまだ決着をみていない。福岡県板付遺跡や佐賀県菜畑遺跡が弥生時代早期の代表的な遺跡であるが、早期の遺跡は九州北部に限定されることから、これを縄文時代晩期とみなす意見もある。水田は弥生時代前期に東北地方北部におよんだ。

5 縄文文化が日本列島全域におよんだのに対して、弥生文化は北海道や南西諸島にはおおよぼ、北海道では「続縄文文化」、南西諸島では「貝塚後期文化」と呼ばれる食料採集文化が続いていた。また、北海道では7世紀以降になると、擦文土器をともなう擦文文化が、5世紀以降のオホーツク海沿岸にオホーツク式土器をともなうオホーツク文化が成立するが、これらの文化も漁労・狩猟に基礎をおく文化である。

「続縄文文化」の骨角器 ① ②釣針、③④かえしのある銚頭、⑤槍、⑥クマの彫刻をほどこしたスプーン、⑦⑧クジラを彫刻したスプーン。これらは墓の副葬品として特別につくられたものとされている。

(北海道有珠モシリ遺跡出土、国(文化庁保管)、伊達市教育委員会)

①弥生時代の水稲耕作の技術が朝鮮半島南部から伝えられたことは、それと共存する各種の遺物が朝鮮半島南部のものと共通することからも確実といえる。イネは中国の長江中・下流域に起源があり、そこで生まれた水稲耕作は山東半島付近を経て朝鮮半島の西岸に至り、さらに日本列島にもたらされたと考えられる。

②弥生時代中期には各地で鉄器とともに石器が使用されているので、純粋な鉄器時代は後期以降である。

③弥生土器の名称は、1884(明治17)年、この様式の土器が東京の本郷弥生町(現在の文京区弥生2丁目)の向ヶ岡貝塚で発見され、この地名にちなんでつけられたものである。

弥生時代前期の水田跡 高知県南国市の田村遺跡は、物部川河口右岸の標高約7～8mの自然堤防の上に広がっている。水田の上に2～4m四方の畦が縦横に走って、田を現在よりも小さな区域にわけていることがわかる。

(高知県立埋蔵文化財センター)



弥生時代には水稲耕作をはじめとして、多くの文化や技術が中国や朝鮮半島から伝わった①。稲の穂摘み用具である石包丁、木製農具をつくるための石斧類などは、朝鮮半島と共通する大陸系の磨製石器である。機織り技術も大陸から伝わった。銅と錫の合金である青銅器は前期に、鉄器は前期末～中期初頭に出現するが②、これらの金属器は中国や朝鮮半島からもたらされた代表的な道具である。

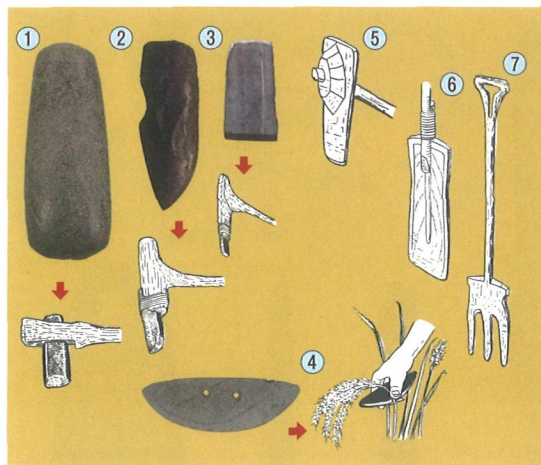
弥生土器③は、縄文土器に朝鮮半島からの技術が加わって生み出された。矢の先につける石鏃などの打製石器、漆製品の製作技術、竪穴住居など、縄文文化の伝統もいたるところにみることができる。

九州北部や中国・近畿地方などで発見されている弥生人骨の中には、縄文人骨に比べて背が高く、顔は面長で起伏の少ないものがみられる。そうした人々は大陸からの渡来人あるいはその子孫であり、弥生文化は朝鮮半島から農耕など新しい技術をたずさえて日本列島にやってきた人々が、在来の縄文人とともに生み出したものと考えられる。

弥生人の生活

弥生時代になって食料生産が始まるとともに、人々の生活も大きく変化した。この時代の水田は、三角州などに立地する湿田や、自然堤防や段丘上に立地する半乾田など、土地の条件に応じて多様だった。水田の区画は1辺数m程度の小区画のものが多く、灌漑・排水用の水路を備えた本格的なものであり、直播だけではなく田植えもすでにおこなわれていたとする説もある。地域によってはアワやキビといった雑穀が栽培された。農耕と並行して狩猟や漁労も盛んで、イノシシの飼育がおこなわれたことも知られている。

耕作用の農具は木製の鋤や鋤が用いられ、収穫は石包丁による穂首刈りがおこなわれた。穀類を穀粒から取り去る脱穀には木臼と堅杵が用いられ、収穫物は高床倉庫や貯蔵穴におさめられた。木製農具の製作には、初めは磨製石器が用いられたが、しだいに斧・鉋・刀子などの鉄製工具が使用されるようになった。後期には石器の多くが姿を消し、



弥生時代の農具製作用の石器と農具 ①大型 蛤 刃石斧(伐採用)、②柱 状片刃石斧、③扁平片刃石斧(②③ともに木工用)、④石包丁、⑤鋤、⑥⑦鋤。①～④にはそれぞれ使用例をつけた。
(①東京国立博物館蔵、②③唐津市教育委員会蔵、④福岡市埋蔵文化財センター蔵)



かわって鉄器が普及し、刃先に鉄器をつけた鋤や鋤、鉄鎌などによって農業の生産力を高めた。弥生土器は煮炊き用の甕、穀物などを貯蔵するための壺形土器に加えて、食物を盛る鉢や高杯からなる。

人々の住居は縄文時代と同じく堅穴住居が一般的であったが、集落には掘立柱の高床倉庫や平地式建物もしだいに多くなった。集落を構成する住居の数も多くなり、西日本を中心として大規模な集落が各地に現れた。

死者は、集落の近くの共同墓地に葬られた。埋葬方法では、土坑墓・木棺墓・箱式石棺墓などに**伸展葬**したものが多い。九州北部などでは、地上に大石を配した**支石墓**や、特製の大型の土器に死者を葬った**甕棺墓**がみられる。盛り土をした墓が広範囲に出現するのも、弥生時代の特色である。方形の低い**墳丘**のまわりに溝をめぐらした**方形周溝墓**は、近畿地方や東海・北陸地方などに多くみられ、また東日本では、方形周溝墓が伝わる中

期の中頃まで死者の骨を土器につめた再葬墓がみられるように、弥生時代の墓は地域によって違いが著しい。

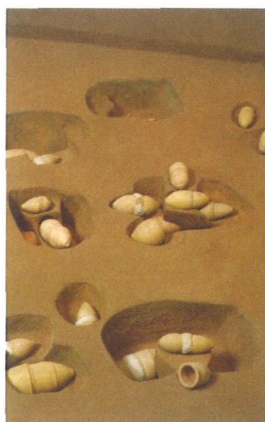
九州北部の弥生時代中期の甕棺墓の中には、三十数面もの中国鏡や青銅製の武器などを副葬したものがみられる。後期に

前期の弥生土器 左から大小の壺形土器、甕形土器、高杯形土器。

(①福岡県板付遺跡出土、福岡市埋蔵文化財センター蔵、②③④福岡県今川遺跡出土、福津市教育委員会蔵)

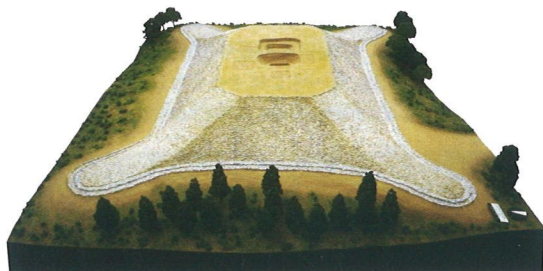
銅鏡は、まず朝鮮半島南部から日本列島に、弥生時代前期末から中期前半にもたらされた。中期後半になるとそれが中国鏡にかわるのは、中国の出先機関である楽浪郡(→p.17)が紀元前108年に朝鮮半島の北部に設置されたためと考えられている。

Q▶ 大規模な墳丘墓の出現は、何を意味するのだろうか。



甕棺墓と人骨 左は甕棺墓の埋葬を復元したもので、右は甕棺内の状況と人骨である。弥生時代には、壺形土器を小児用の棺に利用することは広くおこなわれたが、とくに九州北部では成人を埋葬するための特製の甕棺が用いられた。

(福岡県永岡遺跡、復元模型:国立歴史民俗博物館蔵、人骨:筑紫野市教育委員会蔵)



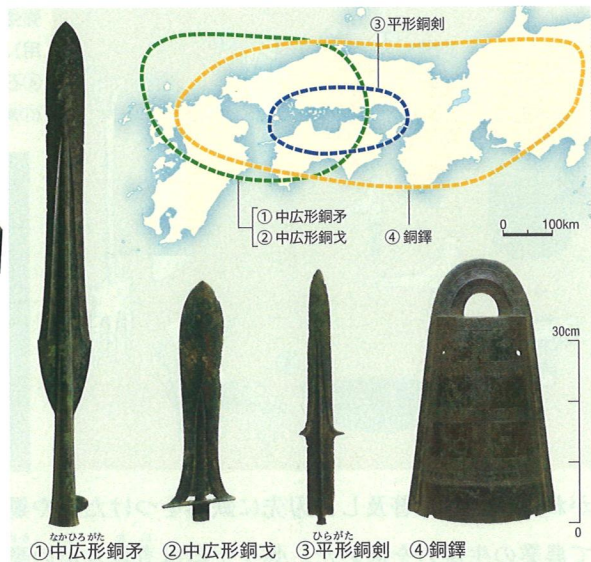
四隅突出型墳丘墓 墳丘の斜面に石が張られている。四隅が飛び出す独特の形をしているが、墳頂部に至る通路と思われる。墳頂には2基の埋葬主体部がある。

(島根県西谷3号墓、復元模型、島根県立古代出雲歴史博物館蔵)

弥生時代中期の青銅製祭器の分布 ①～③は武器の形をしているが、いずれも実用されない祭器と考えられている。(①島根県出土、国(文化庁保管)、島根県立古代出雲歴史博物館、

②福岡県出土、東京国立博物館蔵、③愛媛県出土、京都国立博物館蔵、

④伝香川県出土、東京国立博物館蔵)



①中広形銅矛 ②中広形銅戈 ③平形銅剣 ④銅鐸

なると西日本の各地にかなり大規模な墳丘をもつ墓が出現した。直径40m余りの円形の墳丘の両端に突出部をもつ岡山県の楯築墳丘墓、山陰地方の四隅突出型墳丘墓はその代表例である。こうした多量の副葬品をもつ墓や大型の墳丘墓の出現は、集団の中に身分の差が生じ、各地に有力な支配者が出現したことを示している。

集落では、豊かな収穫を祈願し、また収穫を感謝する祭りがおこなわれた。土器などにシカの絵が描かれ、鳥形の木製品がつけられたが、弥生人は季節ごとに生えかわるシカの角をイネの象徴とし、鳥を現世と死後の世界を往来しイネをもたらし生き物と考えていたのではないかとされている。シカの肩甲骨などに焼け火箸を当てて、割れ目の入り方で占いをおこなった卜骨が各地で出土している。弥生時代の祭りには、銅鐸・銅剣・銅矛・銅戈などの青銅製祭器が用いられた。このうち、銅鐸は近畿地方、平形銅剣は瀬戸内中部、銅矛・銅戈は九州北部を中心に分布しており、共通の祭器を用いる地域圏がいくつか出現していたことを示している。弥生時代後期には九州北部で大型の銅矛と銅戈を、近畿地方で大型の銅鐸をそれぞれの祭りの道具とする2つの地域圏が形成された。

銅鐸が副葬品として個人の墓に埋められることはまったくなく、大型化した武器形の青銅製祭器も副葬品としてはまれであり、集落の人々の共同の祭りに用いられた。それらの青銅製祭器は、山腹などに



弥生土器に描かれた鳥に扮した人物(奈良県坪井遺跡出土、橿原市教育委員会蔵)

①銅鐸は、朝鮮式銅鈴と呼ばれる朝鮮半島の銅鈴に起源をもち、銅剣・銅矛・銅戈も、もとは朝鮮半島から伝えられた実用の青銅製武器であった。いずれも日本列島で祭器としてしだいに大型化した。



こうじんだに
荒神谷遺跡の銅矛・銅鐔出土状況 島根県
出雲市斐川町荒神谷遺跡では、銅鐔6点、銅
矛16本が1つの穴に埋納されていた。また、
すぐ近くには358本もの銅剣が埋められてい
た。さらに島根県雲南市加茂岩倉遺跡では、
39点の銅鐔が一括埋納されていた。

(島根県教育庁 蔵文化財調査センター)



銅鐔にみえる絵 左は、木製の臼と竪杵を用
いて脱穀している様子。右は、シカと狩人。

(兵庫県桜ヶ丘出土、神戸市立博物館蔵)

まとめて埋められる場合があった。青銅器による祭りの終結を示す行
為であるという説や、地域の境界に埋めて邪悪なものがよりつかない
ようにしたという説、あるいは日常は土の中に埋納し、祭りの時に掘
り出して使用したという説など、いくつかの解釈がある。

小国の分立

世界の各地で農耕社会が成立するとともに、戦いの
ための武器や防御の施設を備えた集落が出現し、土
地や水、蓄積された余剰生産物をめぐって戦いが始まったことが知
られている。日本列島でも弥生時代になると、縄文時代にはまった
くといってよいほどみられなかった居住域を溝で囲む環濠集落や平地
との標高の差が40m以上もある高地性集落が現れ、石製や金属製の武
器が出現する^②。こうして戦いの時代に入り、強力な集落は周辺のい
くつかの集落を統合し、各地に「クニ」と呼ば
れる政治的なまとまりが分立していった。多
量の副産品をもつ弥生時代中期の甕棺や、後
期の大きな墳丘墓の被葬者は、こうした小国
の王(首長)であると考えられる。

この小国の分立状況は、中国の歴史書にも
記載されている。1世紀につくられ、漢(前
漢)の歴史を述べた『漢書』地理志によると、

「倭人」^③の社会は100余国にわかれ、楽浪
郡^④に定期的に朝貢^⑤していた。また、『後

②弥生時代中期の奈良県田原
本町唐古・鍵遺跡は直径400
~500mの集落を4重の濠が
囲む。同じく弥生時代中期の
香川県三豊市紫雲上山遺跡は、
付近の海面との差がおよそ
350mもあり大型の石鎌が多
量に出土した。また、弥生時
代後期の大阪府高槻市古曾
部・芝谷遺跡は丘陵の上に
環濠をめぐる高地性集落
であり、いずれも弥生時代を
代表する防御機能をもった集
落である。

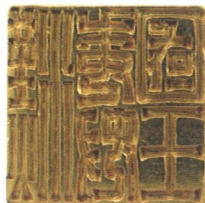
③当時の中国では、日本列島
の人々を「倭人」、その国を「倭
国」と呼んでいたが、7世紀
末から8世紀初めにみずから
「日本」と称し、唐の歴史書で
もはじめて「日本」という国号
を採用した。

④前漢の武帝が紀元前108年、
朝鮮半島においた4郡の1つ。
現在のピョンヤン(平壤)付近
を中心とした地域と想定され、
中国風の高い文化を誇った。

⑤周辺国の君主が中国の皇帝
に貢物を献上し、それに対
して皇帝が君主と認め返礼品
を与える外交関係をいう。



吉野ヶ里遺跡 内外2重の環濠をめぐるし、外濠で囲まれた範囲
は40haにおよぶ。また、内濠の張り出し部には、望楼かと思われ
る掘立柱の建物跡などがみついている。(復元、佐賀県)



金印 1784(天明4)年、福岡県志賀島で農夫が偶然に掘り出したもの。印には「漢委奴国王」とあり、「漢の委の奴の国の王」と読まれている。こうした印は、文書に書かれた内容を守るため、粘土を用いた封印に用いられた。(1辺2.3cm、重さ108グラム、福岡市博物館蔵)

① 綬は印につける組ひもで、印の大きさ・形・材質と綬の色によって格式を表した。

② 「倭面土国王帥升等」と記されたものもあり、倭国王とみるか倭の一小国の王とみるかで意見がわかれている。ただ倭国王とみる場合でも、それは九州北部を中心とした小国の連合体であったと考えられている。

Q▶ 小国の王はなぜ中国の皇帝に使者を派遣したのだろうか。

③ 『三国志』の1つである『魏書』の東夷伝倭人の条のこと。『三国志』は、紀元3世紀に晋の陳寿によって編纂された。

『後漢書』東夷伝
建武中元二年^①、倭の奴国、貢を奉じて朝賀す。使人自^{みづか}大夫と称す。倭国の極南界なり。光武、賜^{たま}ふに印綬^②を以てす。安帝の永初元年^③、倭の国王帥^④(帥)升等、生口^⑤百六十人を献じ、請見^{まを}を願ふ。桓靈の間^⑥、倭国大いに乱れ、更相攻伐して歴年主なし。
(原漢文)

『漢書』地理志
夫^それ楽浪海中に倭人有^{あり}、分^{わか}れて百有余国と為^{なり}。歳時を以て^①来り献見すと云ふ。
(原漢文)

『漢書』東夷伝によると、紀元57年に倭の奴国の王の使者が後漢の都洛陽におもむいて光武帝から印綬^①を受けた。江戸時代に福岡県志賀島から発見された金印が、それと考えられている。107年には倭国王帥升等^②が生口^③160人を安帝に献じたことが記されている。

これら小国は、銅鏡や鉄器など中国や朝鮮半島の先進的な文物を手に入れるうえで有利な位置にあり、ほかの小国より倭国内での立場を高めようとして、中国にまで使いを送ったと考えられる。

邪馬台国連合

中国大陆では220年に後漢が減び、かわって魏・呉・蜀が並び立つ三国時代を迎えた。その三国時代の歴史書『三国志』の「魏志」倭人伝^④によると、倭国では2世紀の終わり頃に大きな争乱がおこり、なかなかおさまらなかった。そこで諸国は共同して邪馬台国の卑弥呼を女王として立てたところ、ようやく争乱はおさまり、ここに邪馬台国を中心とする29国ばかりの小国の連合が生まれた。卑弥呼は239年、魏の皇帝に使いを送り、「親魏倭王」の称号と金印、さらに多数の銅鏡などを贈られた。卑弥呼は巫女として神の意志を聞くことにたけていたらしく、その呪術的権威を背景に政治をおこなったという。

邪馬台国では大人と下戸などの身分差があり、ある程度の統治組織や租税・刑罰の制度も整い、市も開かれていた。卑弥呼は晩年、狗奴国と争ったが、247年かその直後に亡くなった。そののち男の王が立ったが国内がおさまらず、卑弥呼の宗女(同族の女性)である壹与(台与)が王となってようやくおさまったという。しかし、266年、魏にわたった晋の都洛陽に倭の女王(壹与のことか)が使いを送ったのを最

3世紀の倭人の社会や習俗をはじめ、邪馬台国連合に関する情報を史料から読み取り、説明してみよう。

「魏志」倭人伝

倭人は帯方^{たいほう}①の東南大海の中に在り、山島に依りて国邑^{こくう}を為す。旧百余国、漢の時朝見^{ちようけん}②する者あり。今使訳^{しやく}③通ずる所三十国。郡^{ぐん}④より倭に至るには、海岸に循ひて水行し、……邪馬壹国^{じまいつこく}⑤に至る。女王の都する所なり。……男子は大^{おほ}小^こ⑥と無く、皆黥面文身^{けいめんぶんしん}⑦す。……租賦^{そふ}⑧を収むに邸閣^{ていかく}⑨有り。国々に市有り。有無を交易し、大倭^{たい}⑩をして之を監せしむ。女王国より以北には、特に一大率^{いったいしつ}⑪を置き、諸国を檢察せしむ。諸国^{しよこく}⑫之を畏憚^{おそ}す。……下戸^{げこ}⑬、大人と道路に相逢^{さうほう}⑭へば、遂^{すい}巡^{めぐ}⑮して草に入り、辞を伝へ事を説くには、或は蹶^{うづ}り或は跪^{ひざまず}き、両手は地に抛^なり之が恭敬^{きやうけい}を為す。……其の国、本亦男子を以て王と為す。住まること七、八十年。倭国乱れ、相攻伐^{さうこうはく}して年を歴たり。乃ち共に一女子を立てて王と為す。名を卑弥呼^{ひみよ}と曰ふ。鬼道^{きどう}⑯を事とし、能く衆を惑^{まど}はす。年已に長大なるも、夫婿^{ふせ}⑰無し。男弟有り、佐けて国を治む。……景初二年^{けいしよにふ}⑱六月、倭の女王、大夫難升米^{なんしやうみ}等^らを遣し郡に詣り、天子に詣りて朝献^{ちようけん}せんことを求む。……その年十二月、詔書^{しよくしよ}して倭の女王に報じて曰く「……今汝を以て親魏倭王と為し、金印紫綬^{しんしゆ}を假し、装封^{さうほう}して帯方^{たいほう}の太守に付し假授^{かじゆ}せしむ。……し。……卑弥呼^{ひみよ}以て死す。大いに冢^{かづ}⑲を作る。径百余步、徇葬^{じゆんそう}⑳する者、奴婢百余人。更に男王を立てしも、國中服せず、更々相誅殺^{さうしゆさく}し、当時千余人を殺す。復た卑弥呼の宗女^{そうにふ}㉑壹与^{いつよ}㉒の年十三なるを立てて王と為す。國中遂に定まる。

(原漢文)

① 後漢末に楽浪の南半を割いて設けた郡。② 朝貢し謁見する。③ 使節。④ 帯方郡。⑤ 壹(壹)は臺(台)の誤りか。⑥ 長幼。⑦ 顔や体にいれずみをする。⑧ 倉庫。⑨ 官名か。⑩ 役職の一つと推定される。⑪ おそれはばかる。⑫ しりこみする。⑬ 呪術。⑭ 夫。⑮ 三年(二二九)の誤り。⑯ 墳丘。⑰ 殉死。⑱ 一族の女。⑲ 臺与の誤りともいわれる。

後に、以後約150年間、倭国に関する記載は中国の歴史書から姿を消している。

邪馬台国の所在地については、これを近畿地方の大和に求める説と、

九州北部に求める説とがある。近畿説をとれば、すでに3世紀前半に

は近畿中央部から九州北部におよぶ広域の政治連合が成立していたことになり、のちに成立するヤマト政権につながることになる。一方、

九州説をとれば、邪馬台国連合は九州北部を中心とする比較的小範囲のもので、ヤマト政権はそれとは別に東方で形成され、九州の邪馬台国連合を統合したか、あるいは邪馬台国の勢力が東遷してヤマト政権を形成したということになる④。

④ 奈良県桜井市の纏向遺跡は1970年代から発掘調査され、3～4世紀の100haにおよぶ大集落であることがわかった。2009(平成21)年に整然と配置された3世紀前半期的大型建物跡が発見され、のちのヤマト政権の王宮につながるものとして注目されている。

第1章のまとめ

- 問1 旧石器時代から縄文・弥生時代への変化で、人々の生活にとくに大きな影響を与えたものは何だろうか。
- 問2 弥生時代には、朝鮮半島や中国大陸などとの関係が深まるが、それは人々の暮らしや社会にどのような結果をもたらしたのだろうか。
- 問3 社会の変化や、政治的なまとまりの形成・展開、国際関係の変化などの観点から、原始・古代の特徴について、問いを表現してみよう。

古代社会と海外との交流

原始・古代の 展望①

弥生時代以来、日本列島の倭の小国やヤマト政権(倭国)からは中国の皇帝に使者が派遣され、また朝鮮半島の諸国との交流が展開した。このことは、中国の歴史書に記事が伝えられ、石碑などの文字資料ものこり、考古学的な発掘調査成果ともあわせることによって、倭の歴史展開を知ることができる。

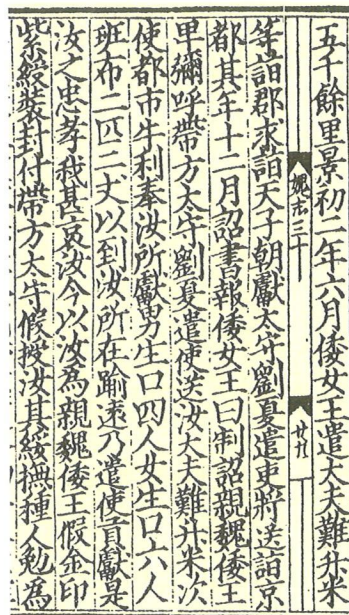
中国の正史をみると、『漢書』地理志(→p.18史料)には倭人の社会が百余国にわかれていたことが記され、『後漢書』東夷伝(→p.18史料)には、57年に倭の奴国王が遣使して光武帝から印綬(金印)を賜ったこと、107年には倭国王帥升等が奴隷を献じたこと、さらに2世紀の半ばから後期にかけて倭国の大乱がみえる。『三国志』の「魏志」倭人伝では、邪馬台国の卑弥呼が小国連合の女王となって争乱がおさまり、239年に卑弥呼が魏の皇帝に使いを送り、親魏倭王に冊封されて金印や銅鏡を賜ったことが、邪馬台国の政治・社会の状況とともに詳しく記されている。

また、倭の奴国王が光武帝から賜った金印(→p.18)が志賀島(福岡県)でみつかり、高句麗の広開土王碑(→p.26)には、4世紀末に倭が百済などとともに高句麗と戦った記事がみえる。

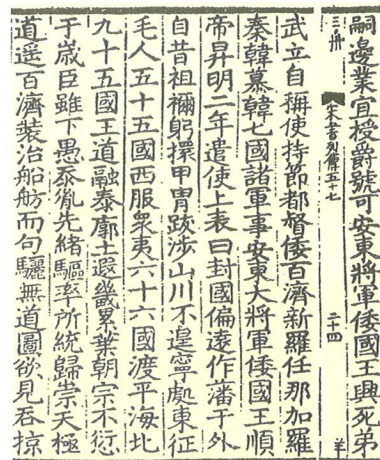
5世紀には、『宋書』倭国伝に倭の5王の記事があり、倭王が代々南朝の宋の皇帝に朝貢して倭国王に任じられたことや、478年に五王最後の倭王武が贈った上表文が詳しくみえる。この上表文では、父祖が「東の毛人や西の衆夷や海北を制圧した」と記している。

▶ 東アジアとの交流は、倭・ヤマト政権・律令国家にとって常に重要であった。ときに中国への使者派遣のない時代もあったが、中国や朝鮮半島との交流は、日本列島の国家形成の歴史にどのような影響を与えたのだろうか。

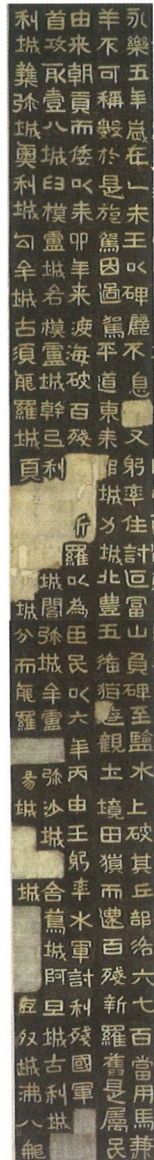
日本で出土した刀剣の銘文をみると、埼玉古墳群の稲荷山古墳(埼玉県)から出土した鉄



『魏志』倭人伝(→p.19史料)



『宋書』倭国伝の倭王武の上表文(→p.27史料)



広開土王碑拓本
(東京国立博物館蔵)

けん
劍(→p.27, 31)には、471年のワカタケル大王の時に、
先祖以来「杖刀人」(武官)として大王に奉仕し
てワケ(乎獲居)臣が天下の統治を助けた由来
を記した銘がある。同じく江田船山古墳(熊本
県)から出土した鉄刀(→p.31)の銘にも、ワカタケル大王に「典曹人」(文官)として奉仕したムリテ(無利弓)が、支配権を維持するためにこの鉄刀をつくったとある。江田船山古墳からともに出土した装身具などは朝鮮半島製とみられ、この地方豪族が半島と交流したことがうかがえる。国内向けにはワカタケル大王を名乗り、宋の皇帝からは倭国王武として冊封されたこの大王は、のちに雄略天皇という名を贈られた。このワカタケル大王の頃、倭王武の上表文(→p.27)にもあるように、ヤマト政権の勢力は日本列島の東西の地方豪族の地にまで広まったとみられる。

続く6世紀前半の筑紫国造磐井の乱(→p.31)では、磐井が新羅と結んで九州を勢力下としたこと、また高句麗・百濟・新羅・加耶からの使者の船をみずからのもとに誘導したことが『日本書紀』にみえる。ヤマト政権の大王にとっては、大陸・半島の先進文化・技術を手の中にして列島での天下統治を実現し、また半島での立場を強める上で対外交流は重要であり、必死に磐井を制圧し、博多湾に直轄地(屯倉)を獲得して外交権を確保したのであった。

磐井の墓は岩戸山古墳(福岡県)といわれ、6世紀前半に九州に展開した石人・石馬文化を特徴とする。筑紫を中心に広がった石人・石馬は、その後廃れ、畿内を中心に展開した埴輪文化へとかわっていった。

▶ 中国の正史のほか、東アジアや列島の各地で出土した石碑や印文・刀剣銘文などの文字資料をみると、複眼的に東アジアの歴史像がみえてくる。ヤマト政権にとって、中国・朝鮮半島諸国との国際関係や列島内の地方豪族との関係は、どのようにからみあって展開したのだろうか。



江田船山古墳出土の鉄刀の銘文「典曹人名無利弓」(東京国立博物館蔵)



稲荷山古墳出土の鉄剣の銘文「辛亥年…乎獲居臣」

(国文化庁保管、埼玉県立さきたま史跡の博物館蔵)



冠



耳飾り

江田船山古墳出土の副葬品の金銅製品
(東京国立博物館蔵)



岩戸山古墳の石人
(八女市教育委員会蔵)

倭の奴国、邪馬台国、倭国や律令国家は、なぜ、そして何を求めて東アジアとの交流を進めたのだろうか。仮説を立ててみよう。また、中国や朝鮮半島との交流のかたちは、ヤマト政権や律令国家の展開とともにどう変遷したのだろうか。資料にもとづいて仮説を立ててみよう。

木簡から古代国家を探る

古代には、文書主義を特徴とする律令制のもとで、紙の文書とともに、木の札に墨書した木簡が、情報伝達的手段として多く用いられた。平城宮跡や平城京の長屋王邸宅跡をはじめ、地方でも大宰府(→p.39)・多賀城(→p.45)ほかの役所の遺跡などから、多数の木簡が出土している。木簡から古代の歴史をみてみよう。

木簡には、文書のほか、地方から京に運ばれた貢進物に付けられた荷札や、漢字の練習書きに用いた習書などがある。紙の文書は捺印されて正式の伝達手段となる一方、文書木簡も、毎日の食料などの請求・支給など、木簡の方が便利な場合に使われた。人・物・情報の移動をそのままのかたちで伝える木簡からは、当時の中央・地方の関係や役所の動きがわかり、あわせて下級官人たちの日常業務や地方の実情を知ることができる。

地方から都に進上された調・庸(→p.41)など貢進物の荷札木簡には、某国某郡某郷のだれがどの税の品目をどれだけの量、いつ貢進したかが、地方で書かれている。税とともに平城宮で収納されたのち、宮内の役所で最後に消費される際に、荷からはずされて廃棄された経過をたどっている。

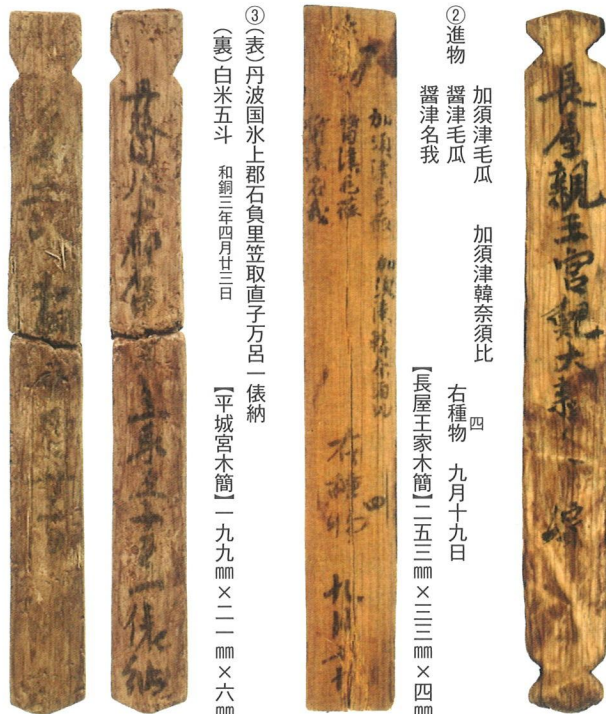
律令の税制では、米のほか、たとえば「調雑物」として鉄・鉄・塩や、鰯・堅魚・烏賊などの魚貝類、紫菜・海藻・海松・海藻根などの海藻類、さらに棘甲贏・雑鮓・近江鮓・煮塩年魚・煮堅魚などの多様な海水産物が諸国から都に送られることになっていた。これら地方の特産品食材が荷札木簡とともに平城宮に集められて、天皇・貴族や下級官

人たちへの給食がおこなわれた。

また、平城京の長屋王邸(→p.43)から出土した長屋王家木簡には、貢進された食料の荷札木簡(①)や、京近くの所領から食料を進上した文書木簡(②、粕漬けの瓜などがみえる)などがある。

▶ 木簡と紙の文書は、どのように使い分けられたのだろうか。紙・木の素材の特徴から、考えてみよう。また、荷札木簡と文書木簡の違いについて、形態にも注目して、考えてみよう。

諸国から平城宮に税として貢進された食料の荷札木簡をみてみよう。丹波からの白米(③)、



③ 表 丹波国水上郡石負里笠取直子万呂一俵納
(裏) 白米五斗 和銅三年四月廿三日

【平城宮木簡】一九九mm×二二mm×六mm

② 進物 加須津毛瓜 加須津韓奈須比
醬津名我 右種物 九月十九日

【長屋王家木簡】二五三mm×三三mm×四mm

① 長屋親王宮鮑大贅十編

【長屋王家木簡】長さ二一四mm×幅二六mm×厚さ四mm

みかわ 三河からのサメ(④)、かずさ おき 上総・隠岐からのアワビ(⑤⑥)などの食料が、贅にえ(天皇用の食料)や調として公民の負担(運脚、-p.41)などで貢進され、宮内で消費されたのである。

- ▶ 貢進物として多様な食料を都に集めなくてはならなかったのは、なぜだろうか。律令財政の仕組みを考えてみよう。
- ▶ 地方からの貢進物の荷札木簡を書いたのは、どのような人々だろうか。また、漢字文化は古代の地方にどのように広まったのだろうか。



木簡をくくりつけた荷物(想像図、三重県埋蔵文化財センター)

律令国家の中央政府と地方の役所とのあいだでは、何のためにどのような内容の文書や木簡のやりとりがおこなわれたのだろうか。仮説を立ててみよう。また、文書や木簡が果たした機能や、地方における漢字文化の広がりとはどのようなものであったのかに着目して、仮説を立ててみよう。



⑥ 隠伎国海部郡 佐吉郷日下マ止々利 養老七年

〔平城宮木簡〕二五六mm×三二mm×七mm



⑤ 上総国安房郡白浜郷戸主日下マ床万呂戸白髪部嶋輪調陸斤 参拾條 天平十七年十月

〔平城宮木簡〕三六四mm×二四mm×四mm



④ 参河国播豆郡析嶋海部供奉八月料御贄佐米楚割六斤

〔平城宮木簡〕二九七mm×二五mm×五mm

①～⑥は奈良文化財研究所蔵

木簡の保存

木簡は、水分を多く含んだ古代の遺構から出土する、きわめて脆弱な遺物である。水漬けのまま大切に扱いながら調査・研究されるとともに、保存処理がほどこされる。空気中でも安定した状態となった木簡の中には、重要文化財に指定された木簡もあり、さらに国宝となった平城宮木簡もある。